

# TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌



## 特集 基礎学力を問い直す

巻頭エッセイ

ナンバーワン・チキン ..... 荻野アンナ 01

特集

英語教育における基礎を問い直す ..... 森住 衛 02  
英語科における基礎学力の現状をどうみるか ..... 斎藤栄二 05  
楽しく学ぶ意欲が基礎学力をつくる ..... 津田雅子 08  
教育機器を利用して基礎学力の定着を進める ..... 高木浩志 10

連載

英語教師のための基礎講座 「音読の実際」の巻 ..... 高梨庸雄 12  
授業レポート 教科書を創造的に活用するために[2] ..... 野澤重典 14  
小学校英語 Just Now  
ここが違う! — 小学校の「英語活動」と中学校の「英語科」 ..... 直山木綿子 17  
単語の文化的意味 60 America ..... 森住 衛 19  
Essay  
Intercultural communicative competence [2] ..... Lynne Parmenter 20

AROUND THE WORLD アメリカは英語の国でしょう? [2] ..... 山本 昭・山本文子 表紙裏  
表紙写真について Learning in Tonga ..... Lynne Parmenter 表紙裏  
特別企画 ..... 編集部 21

Vol.2

SUMMER 2003  
SANSEIDO



## 二重言語と 反二重言語

山本 昭 Yamamoto Akira (カンザス大学教授)  
山本文子 Yamamoto Fumiko (カンザス大学名誉教授)

アメリカが民族のつぼであるばかりではなく、複雑な言語状況を持つ国であることを数字で見よう。2000年の国勢調査(census)では、5人に1人(47 millions)が家庭では英語以外の言葉を使っているという結果が出た。この人口は過去20年の間になんと2倍以上に増えている。国勢調査書はスペイン語、中国語、韓国語、タガログ語、そしてベトナム語に訳された上、その他49言語で解説書(assistance guides)が用意された。個人の権利を尊重するならば、英語と各々の母語を並行して使えるようにするのが1つのいき方であろう。1968年の二重言語教育政策(bilingual education act)はその現れである。しかし、現在、この政策を施行しているのはハワイ州(英語とハワイ語)のみ。この事実は、「合衆国では英語を使え」という力が社会に根強いことを物語っている。

もと合衆国上院議員のS. I. Hayakawa氏を中心としたEnglish as the Official Languageという政治運動は、その具現化を目指したものである。この運動を憲法違反であるとして認めなかった州もあったが、英語を公用語と定めた州は24州に及んだ。一番多くの種類の言語が渦巻いているカリフォルニア州では、「英語を母語としない子どもたちにはまず英語を教えなければならない」とした公立学校英語教育(English Language Education



チェロキーの保育所で、先生方と言語教育について研究会をしているところ

for Children in Public Schools)が法制化され、これに続く州が出てきている。多くのIvy Leagueの大学を抱え教育水準の高いマサチューセッツ州でも、これが2002年に法制化されてしまった、と友人のMITの言語学教授が嘆いていた。そして、さらにブッシュ大統領の提案で、5歳から17歳までの英語の能力が弱いとみなされる者(limited-English-proficient、普通LEPと呼ばれる)への英語教育に、政府から資金援助がなされることになった。

「移民の国」であればそれぞれの民族が母語を維持しアメリカを多言語国家にしても当然のように思われるが、その反面「移民の国」であるからこそ言語を統制し共通の言葉を国語とすることが必要であると考える人も多い。アメリカの複雑な言語事情に関しては、次のクロフォード氏のHPを参照されたい。

<http://ourworld.compuserve.com/homepages/JWCRAWFORD/home.htm>



## Learning in Tonga

Lynne Parmenter (Associate Professor, Waseda University)



This photo is taken in the classroom of the biggest government primary school in the Tongan capital, Nuku'alofa (population 30,000). In primary schools, the language of instruction is Tongan, but children also learn English in preparation for secondary school, where the language of instruction is English.

In the picture, you can see a class of 7-9 year old children learning Tongan. The teacher (who is standing at the back of the

classroom) has written questions on the blackboard, and children are writing the questions and answers in their notebooks. The atmosphere is hardworking but relaxed, with children working at their own pace. The boy wearing the hat constantly runs to the blackboard and back - he cannot see the blackboard from his seat, but glasses are too expensive for schoolchildren in Tonga. In fact, quite a few of these children walk to school and play outside barefoot, as

they do not have shoes for school. Classrooms are decorated colourfully with children's work and materials made by teachers and students - you can see rows of handmade books hanging on the classroom walls. Facilities and resources are very limited in most schools in Tonga, but teachers and students are highly motivated and the level of teaching and learning is extremely high.



巻 頭 工 ツ セ イ

# ナンバーワン・チキン

荻野アンナ Ogino Anna

わずか二日の滞在だが、沖縄でアメリカ統治下の話を、あれこれ仕入れてきた。

「こちらの女性は、アメリカという名前が多いねえ」  
米兵が首を傾げた。よくある名前とは「うさ」で、アルファベット表記なら「USA」になる。

同じ日本でありながら、パスポートがなければ行けなかった沖縄。「ヤマト」の人間は、復帰前の現実を、悲劇のひとつで括りがちである。実際には物怖じせず異文化とつきあい、それなりに折り合いをつけてきた側面もある。

沖縄のお年寄りには、教育を受けた若い世代より、英語がウマイ。オジイ、オバアが当たり前のようにハンバーガーやステーキを食べ、喫茶店で「アイスワラ」を頼む。教科書式の「ウォーター」ではなく、耳で覚えた「ワラ」が未だに生きている。

そこで「英文和訳」を一題。ヒント、ライカムは地名である。ちなみにこの問題、私はまったく歯が立たなかった。

「ナンバーワン・チキン・スピーク・タイム、ユーカム、ミーカム、ライカム」

さて正解である。一番鶏（ナンバーワン・チキン）の鳴くところに、ライカムで会いましょう（ユーカム、ミーカム）。

「一番鶏」はちょっとムリがあるが、「ユーカム、ミーカム」は使えそう。もう一例、挙げる。台風で屋根を飛ばされた人が言ったという。

「タイフー、カム。マイ・オンボロヤ・ゴー」

とにかく通じさせてしまおう、という迫力が爽やかである。むろん、より込み入った話を可能にするのは文法である。不思議なことに、文法を獲得する

と蛮勇を失う。時には破格やいい加減を恐れない心も必要だと思う。

私の住んでいる横浜も、沖縄ほどではないが、インターナショナルな街である。繁華街の伊勢佐木町と港の間に「本町通り」がある。最近、通りの語源を教えてもらった。昔、上陸した外国船の船員さんたちは、夜ともなると、伊勢佐木町に飲みに行った。街灯の整備されていない頃のこととて、帰りは闇の中を手探りの状態となる。路地を抜けて、広い大通りに出ると、港はすぐ先と知れる。無事辿り着いたと喜んで、歓声を上げた。

口語英語で「やったぜ」は「ハンキー・ドーリー」。訛って「ホンチョー・ドーリー」、本町通りになったとか。ここまで書いてから、父に聞いてみた。「『ハンキー・ドーリー』のスペル、分かる?」

Hunky-doryの後に、父は「だと思っ」を付け加えた。フランスで生まれ、アメリカで育った父は、日本在住半世紀。日本語カタコトのまま、英語のスペルも怪しくなっている。結果、わが家では“*He is very シブチン, n'est-ce pas?*” 式のごた混ぜが横行している。なぜケチではなくシブチンなのか、というと、母親が関西出身なのである。このややこしい家庭のおかげで鍛えられた。コトバは度胸、hunky-doryと、相手に向かって踏み出す一歩を大切にしたい。

## おぎの あんな

横浜市出身。作家、慶應義塾大学文学部助教授。専門は16世紀のフランス文学。1991年「背負い水」で第105回芥川賞を受賞。現在、大学で教鞭をとりながら執筆活動、テレビ、ラジオ、講演など幅広く活動している。趣味は落語、ブタグッズコレクション、大道芸。

特集 基礎学力を問い直す

英語教育における基礎を  
問い直す

森住 衛

(桜美林大学教授)

英語教育における基礎とは何かに関しては、本誌の前身『三省堂英語教育中学編』No. 42 (2000年10月)とNo. 44 (2001年4月)で取り上げた。前者では、コミュニケーションの基礎・基本を問い直し、後者では、英語教育の根本を論じた。あれから2年余りを経たが、この間に局面も変わった。とりわけ大きな移行は、昨年4月の新教育課程・学習指導要領の実施で、完全週5日制、英語「週3時間」、絶対評価の加味などが始まった。また、同7月には、文科省から「<英語が使える日本人>の育成のための戦略構想」が出され、中学卒業の英語学力の目安や教員研修などが具体的に発表された。さらに、同じ月に「指導要領枠外」の扱い容認の意向が発表された。そして、これらの動向と相まって、基礎学力の低下という問題が改めて浮上してきた。本稿はこの基礎学力の問い直しの任を負うわけだが、まず、基礎とは何かを概観する。その上で先の小論以後の新しい要素としての、週3時間、絶対評価、戦略構想を中心に、筆者の論がどのように適用されるかを論じていきたい。部分的に、先に挙げた筆者の論と重なるところがあるのはご容赦願いたい。

## 1. 基礎学力とは何か

「基礎」を「最重要」という意味でとらえるなら、英語教育の基礎は、言語材料では「語彙・文法」、言語活動では「考える・読む」、態度・気づきの点では「言語観」の3つである。

言語材料は一般に、音、文字、語彙、文法、表現の5つに分かれる。いずれも重要だが、特にどれか、となると、語彙と文法である。この2つがあれば、実際のコミュニケーションにも役立つし、異文化理解やメタ言語能力など認知的な言語学習にも耐えら

れる。実際の英語の使用でも、語彙の知識がなければどうしようもない。英語を聞けない、話せない、読めない、書けないのは、単語を知らないからである。また、文型や文法の知識がなければ、同じく4技能の発展的な学習が保証されない。しばしば、「日本人は文法はできるが使えない」と言われるが、「文法を知らないから使えない」のである。ところが、この語彙も文法の扱いも薄くなっている。扱う語彙は1970年代から下降線をたどっている。文法も1980年代から軽視されてきた。これでは基礎学力が落ちて不思議ではない。

言語活動には5技能がある。「考える・聞く・話す・読む・書く」である。すべて大切であるが、このうち何が基礎となるか。現在の中学英語教育の環境では、すなわち、学校教育、EFL、「週3」、40人学級などの条件下では、「考える・読む」の2つである。「考える」を基礎としたのは、<ことば=思考・思想>だからである。言うまでもなく、<ことば=慣れ・無意識>でもある。日常生活においては、この傾向が強く出る場合もある。しかし、学校教育で扱うことばの学習は、意図的に「思考」や「思想」に傾斜すべきであろう。また、「読む」は、すべての基になる。大意がとれ、きちんと朗読できれば、「聞く・話す・書く」能力がついてくる。一斉授業で行う授業形態にも合っている。

基礎を論じる場合、もう1つ忘れてならないものがある。ことばの観点すなわち言語観である。言語観とは、ことばと人間やことばと社会との関係のとりえ方である。具体的にいうならば、「英語が話せること=国際人、ではない」、「Queen's EnglishやGeneral Americanの発音のみが正当な英語ではない」などの英語のとりえ方である。また、「少数民

族や先住民のことも大切に」、[ある国や地域に行ったら少なくともあいさつぐらいはその国や地域のことばを使う]など言語全般に関する見方である。言語観は、上記の言語材料に関する知識の「知る」や言語活動の技能の「使う」に対して、言語のあり方を「判断する」領域に関するものである。したがって、前者2つに比べて「正答」が出にくい。正答が出にくいが故に、学校教育で教師という人生の先輩の「援助」を受けて議論ができる。敢えて、学校の英語教育の基礎とする由縁である。

## 2. 「週3時間」での基礎学力— 1つの事例

中学の英語の授業時数は、1981年からの3年間ほどは「週3完全実施」であった。しかし、当時は選択の時間が比較的容易に取れた。そのため、なし崩し的に「週3+1」になって、これが昨年(2002年)度まで続いていた。しかし、今回はそうはいかない。週5日制完全実施のためである。他の科目も余裕がなくなったので、英語にまわってこない。加えて、言語材料はほとんど減っていない。当時と比べて生徒の意欲も落ちてきている。このために、実践的コミュニケーションのうち「聞く・話す」もままならないだけでなく、もっと基本的な学習活動、すなわち、最低限の文法の知識の習得すらもおぼつかなくなってきている。

このような状況で基礎学力を保証するにはどうしたらよいのだろうか。千葉県習志野市の小原弥生教諭の例を紹介しよう。研究授業も2度見せてもらったが、彼女は、週3の状況で生徒に保証してやれるのは、「自ら考えたことを話す」ための実践的コミュニケーション能力の基礎であるとして、このためにSix Stepsを考え出し、実行している。Six Stepsとは、①Reading Aloud, ②Buzz Reading, ③Look-up-and-Saying, ④One-Shot Reading, ⑤Shadowing, ⑥Recitingである。この活動を中学3年生に毎授業時間の20分くらいを割いて実施してきて、その成果もあげている。注目したいのは、目標としているのが単なる会話表現でないこと、そして、Reading関係の活動に焦点を当てたことである。この6つの中には、すでに部分的に英語の授業で実施されているものがあるが、これらを6つに

まとめたのが特長である。筆者は、「コミュニケーション・アプローチの3つの忘れもの」として、「朗読、模写、暗唱」を挙げているが、これらの復古的な活動こそ、かえって現代の実践的コミュニケーションの基礎になると信じている。小原氏の6つの中に、このうちの2つが入っている。行き詰まった窮余の策が本来に戻った例ではなかろうか。

## 3. 観点別評価・絶対評価の導入と基礎学力

観点別評価も絶対評価も望ましいことである。しかし、やっかいでもある。2つの長所が生かされるように、英語教育の基礎という点から観点別の4点をみてみよう。

関心・意欲・態度——この3つをまとめたとなえ方をしているが、実態は異なる。まず関心があり、やってみようかなという意欲が起り、それを態度で示す、という段階を踏む。そのため、例えば、関心があるが意欲がない、関心も意欲もあるが態度に出ない、あるいは表し方が下手であるなど、事例は個々に分かれる。本来の観点別では、文字通り、関心という観点、意欲という観点に分けなければならないが、あまり細かくすると動きがとれなくなる。これが、先に「望ましいがやっかいである」とした由縁である。現実的には、この3つの観点はまとめて扱うしかないだろう。さて、その際の基礎あるいは最も重要な部分は何かということになると、意欲である。関心は心の中で見えにくい。態度は、いろいろな形で出てくるので測りがたい。

表現する力——「話す」については、発音、語彙、文法、表現、内容に至るまで多岐にわたり、このどれもが大切であるが、最も重要なのは内容である。何を話題にどのように切り込むかである。もちろん、その前提となる語彙と語順などの文法も重要であるが、文法については、話しことばでは3単現の-(e)sや単複の呼応などは大目にやり過ごす。発音もそれらしき音が出ていればよしとする。この‘World Englishes’の時代にあまりに厳格にするのは、現実的にも理論的にも合わない。「書く」についても同様にその内容が最重要であるが、書きことばでの文法は重要である。文字の正確さやつづりも大切に違いないが、これは昨今のPCやメール、携

帯電話などの普及で、実際的にはあまり問題になってこない。

**理解する力**——「読む」は、観点別では、朗読と解釈に大別される。前者は、より多く表現する力に関するのだが、さらに個々の発音の正しさ、区切りやポーズの適切さ、感情移入などに下位区分の観点に分かれる。この中では、特に意味のまとまりで読めることが大切である。後者も、細部の正確な読みから大枠をとらえた概要の把握などいくつかの段階があるが、これまで見逃しがちで重要なのは大意の把握（探し読みや流し読み）である。「聞く」もこれからは「探し聞き」や「流し聞き」が基礎となろう。

**言語・文化の知識・理解**——言語に関しては、文法がわかっているかどうかにかき集約される。大切なのは、「わかっている」というのは「覚えている」とは異なることである。文化については、英語圏文化が重要なのは言うまでもないが、最近では異文化理解の点から英語圏以外の文化も広く取り上げられるようになった。全体として、権利に関すること、我が身を振り返ることの2つが重要な視点となる。

以上の観点別に、昨年度から、絶対評価という規準がついてきた。絶対評価とは「目標に準じた評価」であるが、この目標が、全体的な目標か、個人的な目標かで揺らいでいる。全体的な目標は、学習指導要領で示されていることである。文科省は一昨年来、「指導要領は最低線」と言っている。となると、指導要領で示されている内容がすべて基礎学力になる。ところが、学習指導要領のすべてを全員の生徒がマスターするなどは不可能に近い。そこで、目標を地域や学校、そして、最終的には生徒一人ひとりに定めることになる。これが本来の絶対評価のよい点でもあるのだが、それぞれ個別の規準を設けることになるので、全体の位置付けがわからなくなる。この結果、統一試験が必要ということになる。この現象が昨今現れてきた、公立中学では不安である、という声になっているのが現状である。

#### 4. 「戦略構想」による英検3級と基礎学力

冒頭の文科省の「戦略構想」では、「中学卒業段階で平均して英語検定3級程度の能力」という目

標設定がなされている。英検1次の問題は、会話表現が多く含まれるが、大筋としては、語彙力と文法力を問うているといえる。リスニングも然りである。問題は3部構成である。第1部が、対話を聞き、その最後の文の応答を選ぶ、第2部が、対話と質問を聞き、その答えを選ぶ、第3部が、英語と質問を聞き、その答えを選ぶ形式をとっている。すべて4肢選択である。ちなみに、2002年の問題の第1部と第3部の最初の問題は以下のとおりである。

[第1部]

A: Is John going with us to the soccer game?

B: No, he can't go.

A: Oh, really? Why not?

1. He didn't go. 2. He has a test. 3. It wasn't a game. 4. We can play soccer.

[第3部]

Paul went to see a movie on Saturday. He got to the theater at twelve o'clock. It was a popular movie, so he couldn't get a ticket for the one o'clock movie. He waited and saw the three o'clock movie.

Q. What time did Paul see the movie?

1. At 12:00. 2. At 1:00. 3. At 2:00. 4. At 3:00.

これが音声で出題されるので、「聞く」訓練が必要となる。しかし、このためにも「読む」を強化した方がよい。「読めても聞けない」ときどきはあがあるが、「読めなくて聞ける」ということは、EFLの場合には皆無に近いからである。そして、このリスニングの問題も、やはり、語彙と文法の力が重要といえないだろうか。第1部はH. E. Palmerの定型会話さえ想起させるほどに、文法力が試されている。第3部は、最後のHe waited and saw the three o'clock movie. がキーである。文法もさることながら、総じて言えば、語彙の問題となる。第2部の例は割愛したが、第3部と同じ議論が当てはまる。

以上、「週3」、観点別・絶対評価、目標の英検3級に関係させて英語教育の基礎を問い直してきたが、結論は、中学校の英語教育では「考える・読む」活動は保証したい、このために語彙と文法力を付けさせたい、そして家庭教育や社会教育では手薄になる言語観をしっかりとさせたい、となる。

特集 基礎学力を問い直す

# 英語科における基礎学力の現状をどうみるか

齋藤 栄二  
(関西大学教授)

## 1. 基礎学力は下がったのか、下がっていないのか？ — その背景を探る

今、日本人の生徒・学生の学力が問われています。学力は下がったのか、下がっていないのか。前から底流には、「学力が下がっているのではないか」ということは囁かれていました。しかし、このことに世間が注目し始めたのは、おそらく1998年頃からではないかと思います。京大教授の西村和雄氏が、各地の国立大学や、私立大学の文科系と理科系の各学部、大学院、ビジネス・スクールにおいて、数学の問題による広範囲な学力調査を行いました。そして次のようなメッセージを発したのです。

日本が有能な人材を保有しているのなら、どんなに現在の状況が悪くても希望を持つことができる。しかし、日本の教育は、この20年間に世界でも類のないほど低い水準に下げられてしまった。今や、日本を代表する大学、また、理工系大学や医学部においてさえ、小学校中学校の算数を満足にできない学生を抱えている。「生きる力」「ゆとりの教育」のキャッチフレーズで行われてきた教育政策の下で、次代を担う若者が犠牲になってきたのである。

(戸瀬信之・西村和雄著『大学生の学力を診断する』岩波新書)  
この辺から、新指導要領への批判の火が次々と上がり始めました。ここでまず私が指摘したいのは、問題は英語の学力に限ったことではなく、日本の次代を担う若者全体の学力低下ということだということです。小学校において、実践を通して新指導要領の是非を問うたのは、陰山英男氏だと思います。ある意味では、新指導要領全体に流れる、ハードルを下げる考え方に対する挑戦ともとれます。

## 2. 文部科学省はどう対応したか

ご存知のように、新指導要領が小学校、中学校において昨年の4月から実施に入りました。それに先立つ2002年の冒頭に、遠山文部科学大臣は、「確かな学力向上のための2002アピール『学びのすすめ』」を発表しました。また同省は指導要領実施直前になって、「指導要領に示されたのは最低基準であり、発展的な学習についてはその最低基準をクリアした上で、子どもの実態に応じて指導してよろしい」と発表しました。学習指導要領は、1961年に国家基準としての法的拘束力を持って以来、ずっと上限を示してきたのです。それを下限でもよいと発表したのです。教科書を作っている私たちの立場からしても前代未聞のことです。これらは私が1.で述べた学力低下批判に対する文部科学省側の対応といえると思います。今まで、40年以上にわたって守ってきた基準を自ら変更しなければならなかったということは、この問題の深刻さを物語っているといえるでしょう。

## 3. 教育課程実施状況調査が行われた

論争の出発点は「学力が下がったのか、下がっていないのか」でした。答えを出すためには、調べてみなければなりません。文部科学省は、内外の批判にこたえる形で「平成13年度教育課程実施状況調査」を平成14年2月21日～24日にわたって行いました。対象学年は小学校5、6年から中学校1～3年まで。参加人数は小学校3,532校、約20万8千人、中学校2,539校、約24万3千人です。

#### 4. どんな問題が出題されたか

テストは以下の内容で構成されています。

[テープによるリスニング問題]→大問3

[読解を中心とした問題]→大問4～5

[自由英作文]→大問1

[条件英作文]→2

以上が基本パターンで、それぞれの大問の中にいくつかの小項目の質問が出題されています。「読解を中心とした問題」という項目で私が見分けたところもありますが、その大部分は対話文から成り立っています。実践的コミュニケーション能力の育成を十分に意識した問題作成ということが出来ます。

##### 問題の内容についての私のコメント

私は実際の問題を見せていただいて、すぐに高校生及び高校の卒業生を対象とするセンター試験を思い出しました。「これはセンター試験の中学校版だ」と感じました。違いは、センター試験ではリスニングの問題はありませんが、こちらではリスニングが準備されています。その上に自由英作文が1問ですが出題されています。それにプラスして条件英作文が2題です。テープ問題が大問で3題出されていることは、「十分聞かせる」授業が前提になりますし、自由英作文や条件英作文の出題は、発信型の授業展開を教師に要求します。結論としては「それぞれにこなれた良問で、基礎学力を測るのには適している」というのが私のコメントです。

ついでですが、これは今問題となっている絶対評価の問題作成にも参考になりそうです。中間テストや期末テストで、どういう問題を作ったらいいか悩んでおられる先生には、今回の教育課程実施状況調査の問題を参考にされることをお勧めします。

#### 5. 結果はどうであったのか

これについても膨大な調査結果の集計資料が、国立教育政策研究所教育課程研究センターから出されています(注)。なおこの調査には、生徒用のみならず教師対象のアンケートも含まれています。

結果の判定をするのに当たり、今回評価のモノサシとして「設定通過率」という算定基準が打ち出さ

れました。この設定通過率の数字は、教員や文科省の調査官などが20人で合議して決定したそうです。すべての問題に個々の設定通過率があり、調査結果には総受験者のうち何パーセントが設定通過率を通過したかが記載されています。しかも設定通過率を中心に上下それぞれ5%の幅を設定し、この幅内に収まっていれば「設定通過率と同程度と考えられるもの」とし、その幅を超えていけば「設定通過率を上回ると考えられるもの」とし、その幅まで達していなければ「設定通過率を下回ると考えられるもの」としました。一度読んだだけでは分かりにくい複雑さです。そういう条件の上に立って、「平成13年度小中学校教育課程実施状況調査の結果概要について」は次のように述べています。

##### ペーパーテスト ア 教科, 学年別等に見た概要

「学習指導要領の目標、内容に照らした学習の実現状況を問題ごとの設定通過率との比較から判断した結果、中学校理科第1,2学年、中学校英語第3学年を除き, 設定通過率を上回ると考えられるもの又は同程度と考えられるもの問題合計が全体の問題数の半数以上を占めている。

このことから、教科ごとの対象学年における学習指導要領の目標、内容に照らした学習の実現状況については、全体としてみれば、おおむね良好といえる。」(下線筆者)

と結論付けています。しかしながら、12月14日の新聞各紙は一斉にこの結論に異を唱えました。「“甘い”文科省の評価」(毎日新聞)、「算数、数学、英語、全学年で想定以下」(朝日新聞)、「学力低下やっばり…教育の場に波紋」(日本経済新聞)、そして、いわゆる有識者といわれる人々のコメントも、「学力低下派」と「おおむね良好派」にはっきり分かれていました。同じ基礎資料に土台を置きながら、主張がこれほどはっきり分かれたのも珍しいでしょう。

#### 6. どう考えればよいのか

私はずっと「書く力」に注目してきました。なぜかというと、「書く力」は、今求められている実践的コミュニケーション能力、なにかんずく発表能力の基礎になるからです。日常あいさつとか買い物レベ



ルのやり取りをするだけなら、日本人の場合でも音声訓練から入るだけでもいけます。しかし、今求められているのは、それにプラスして「自分の考え」などを表現する力です。こうなるとしっかりとした書く力が必要になってきます。たとえば何かの機会にあるまとまったスピーチをする場合を考えてみてください。よい話をするためには、私たちはまず下書きをします。下書きがしっかりしていないと、よいスピーチにはなりません。つまりそれは「書く力」です。このようにして「書く力」はしっかりとした発信能力の基礎になります。書く力を伸ばすということは話す力の基礎と、書く力自体の力を伸ばすことのために必須なのです。

私は今の中学生の書く力の貧弱さについては、いくらでも例を挙げることができます。

「いくらお金をください。」→ Some money give me. (Give me some money. で英語になるのでしょうか。)  
「あなたはどんな動物が好きですか？」→ What do you like animal? (→ What animal do you like?)

そのほか I am interesting movies. My sister is go to the this school. など枚挙に暇がありません。高校入試の自由英作文を先生方と検討したことがありました。次のような文が次々と出てきました。Osaka is takoyaki. (→ Osaka is famous for its takoyaki. のつもりか。) だがその後が続いてすぐ Osaka is okonomiyaki too. と 出 て く る。Namba and Doutombori are dating. などというものもあります。そんなことができるなら私もこの目で見てみたい。とにかく怖いのは、これで生徒が英語を書いたと思ひ込むことです。これを読んでいる先生方にも心当たりはきっとあると思います。ここで私は生徒の弱い力を非難しているのではありません。これらは生徒の責任とはいえないからです。コミュニケーション活動を軽薄にとらえて、基礎作りを忘れ「生徒が何かしゃべってさええすれば、それでよい」などと考え、そういう教え方をしてきた結果がこういう英文の大量表出をもたらしているのです。ここに私の問題意識があります。

さて今回行われた「平成 13 年度教育課程実施状況調査」の中の「書く力」に関して、各紙はどのようなコメントを寄せたでしょうか。読売新聞は次の

コメントを発しています。

「内容・領域別で、著しく達成度が低かったのが『書くこと』。想定した正答率を上回ったのは皆無で、平均正答率は中一で 14 ポイント、中二 15 ポイント、中三 19 ポイントも想定を下回っていた。」(2002 年 12 月 14 日付朝刊)

やはりこれは私の予想通りでした。なぜ私の予想通りというのか説明させてください。私はここ 20 数年間、毎年全国各地の中学校や高等学校の英語研究会に講師として呼んでいただいています。5、6 年前までは「生徒にどうコミュニケーション活動をさせたらよいのか」というテーマでの話が求められました。ところが最近では明らかに違った流れが出てきました。

「先生、私のクラスの生徒は授業の中でコミュニケーション活動やゲームをやらせると、それはそれなりに楽しんでやるのです。インタビュー・ゲームなどにもかなり積極的に参加はするんです。ところが、中間テストや、期末テストで英文を書かせると、かなりいいかげんな文しか書けない。これでは入学試験が乗り切れるのかどうか、正直なところ心配です。どうも基礎となる力が付いていないようなのです。何か方法はありますか」

こういう声とその代表です。今回資料を調べてみて、こういう声と一致していることを私は感じざるを得ません。しかも頭に置かなければならないのは、今回の調査はもちろんのことですが、比較の対象となった前回の調査も同じ旧指導要領下で学んだ生徒の学力評価ということです。昨年からスタートした新指導要領実施下の学力との比較ではありません。週 5 日制の足りない時間数という条件下の生徒の学力と比較したものではないということです。生徒にしっかりと力を付けることを考えるべきです。皆さんと力を合わせて、現場から学力問題に答えを出していこうではありませんか。

(注)「平成 13 年度教育課程実施状況調査(小学校・中学校)ペーパーテスト調査集計結果」「平成 13 年度教育課程実施状況調査の結果概要をみるに当たって」「平成 13 年度教育課程実施状況調査の結果概要について」「平成 13 年度教育課程実施状況調査(小学校・中学校)質問紙調査集計結果」「平成 13 年度教育課程実施状況調査(中学校)質問紙調査集計結果(その 6) - 英語 -」など。国立教育政策研究所：<http://www.nier.go.jp/homepage/kyoutsuu/index.html>

特集 基礎学力を問い直す

# 楽しく学ぶ意欲が 基礎学力をつくる

津田雅子

(東京都練馬区立開進第二中学校)

## 1. はじめに

最近、授業が楽しい。生徒が真剣に取り組んでいる姿を実感できるからである。先日実施した speaking test において ALT の先生が「すばらしい態度で、よく話す」と絶賛してくださった。手前味噌ではあるが、昨年度の2年生は speaking test やその他の場面において、楽しくコミュニケーション活動に参加し、積極的な学習態度を示していた。そしてそうした状況が生まれているのは、多くの生徒が英語の基礎学力を身に付け、学習することへの関心や意欲、態度が育っているからだろうと考えている。

## 2. 基礎学力って何だろう

さて、基礎学力とは何なのだろうか。佐藤学氏によれば、現在日本で主張されているのは「basic skills の徹底」ということになる。本来は、literacy (必要最低限度の共通教養) というのが海外でのとらえ方のようなのであるが、ここでは、日本で考えられている「basic skills の徹底」について考えていきたい。

この basic skills を英語という教科の中でどうとらえるか？ まずこのことを明確にする必要がある。英語におけるスキルとは、聞く力、話す力、読む力、書く力、この4つの技能に関わる能力であるのは当然のことである。しかし、こうした4つのスキルにおける基礎学力のどこまでを基礎として定義することができるだろうか。学年段階によってもその内容は異なるであろうし、なかなか難しい。

そこで、ここでは具体的に「話す力」における basic skills について考えてみたい。1年次の学習を終えた2年生のスタート段階では、「自分の気持ちや身の回りのできごとなどの中から簡単な表現を用

いてコミュニケーションを図」ることが必要であるが、少なくとも自分の名前、出身地、誕生日、年齢、住んでいる場所など、自分に関する最低限の事柄が表現できるようになってほしいものである。

Hello. My name is Uchida Ken. I am from Tokyo. I am 14 years old. My birthday is October 4th. I live in Nerima. I like music...

上記のような文章を口頭で言うことができれば2年生スタートの段階では、「話すこと」の基礎能力はありと判断してもよい。その中に多少間違いがあったとしても聞き手が全体として意味を理解できる程度のものであれば特に問題はない。また、間違いがあった場合、それについて聞き手が再度確認したりして、それに対して応答できれば十分に基礎学力は備わっていると判断してよい。

## 3. 基礎学力をいかにして保証していくか

### (1) コミュニケーションへの関心を喚起させる

昨年度の2年生の授業の中でいつも心がけてきたのは、彼らが活動する場面を数多く創り出すことであった。英語のシャワーを浴びせることも必要であるが、学習した英語を使ってみるチャンスを多く与えるということが大切である。

1年次においてはあまり複雑な言語活動ではないが、information gap を取り入れた interview game を中心に、とにかく多くの時間を与えて彼らに活動をさせてきた。座席を離れ、自由に教室を歩きながら、友だちと出会い、「No Japanese, only English!」の注意を受ける中で、あいさつを交わし、相手にインタビューをする。そして、相手から答えを聞き取り、また、次の友だちに出会っていく。単純な活動ではあるが、日本語を介さないで英語を使う場面

多く持つことは、話すという活動に臆病にならずに英語に慣れる機会を作ることになった。また、毎回、ワークシートを自分で作るとなると大変だが、教科書会社から出ている activity 集を活用するなどしてあまり負担のかからない形で実践すれば、継続的に実践できる。生徒たちは与えられた時間の中で、英語を話し、コミュニケーションすることの楽しさを十分獲得することができたように思う。そしてそのことが話すという技能の basic skills 獲得へとつながってきている。全てのスキルを獲得する上で最も基本的なスキルは何か、それは生徒自らが楽しく積極的に学習する態度を身に付けることである。それ自体が生徒のそれぞれのスキルにおける基礎学力を獲得することにつながると考える。

## (2) ボトム・アップとトップ・ダウンの併用

basic skills を獲得させる上で具体的な指導の方法について考えておきたい。bottom up 方式, top down 方式の併用である。bottom up ではダメ, top down が全てというような話も聞いたこともあるが、基礎学力を育成していくにはこの両方の併用が必要だと思う。例えば、単語力。私は、単語を多く知っているということが英語の基礎学力の根底をなすと考えているが、文法を十分理解していない場合も、単語をつないでいくことでどうにか伝えたいことを相手に知らせることができる。そんなわけで生徒には単語力を大いに付けさせたいと思い、いろいろな方法による単語の覚え方を生徒に紹介している。まずは目を使って、文字のつながりを視覚的に把握する作業、音声を通して覚える方法、手を使って書きながら覚える方法、そして文章の中でその語がいかに使われているか予習ノートの中で確認していく作業などである。生徒は事前に予習ノートで単語の意味を辞書で調べ確認しているが、授業の中で音声を学びながら、また、同じような意味を持つ語や反意語などとともに、学習していく場面があったり、全くそうした事前の準備のない状況で reading 教材を通して、推測しながら新出単語と出会い、本来の意味を確認する場面があったりする。佐藤学氏は「基礎的な知識や技能であればあるほど、反復練習のドリルによる習得でなく、経験を通して機能的に習得される」と述べているが、1つの方法ではう

まく力は付いていかない。反復練習とともに、単語を使用して自己表現するチャンスを数多く与えていく中で生徒は単語を獲得していく。

## (3) 目標設定は高めに

教師は指導において、生徒の到達目標を意識して指導しなければならない。その際に目標を高めに置く必要がある。生徒の能力をみると slow learners は学習過程で難しい状況をたくさん抱えている。「この生徒には多くを望めない…」と考えてしまっただけではその生徒の基礎学力を付ける機会を失ってしまう。決して甘めの目標を設定せず、生徒にここまでやり遂げてほしいと教師側が常に思っていれば生徒はその下の段階をクリアして、その目標を達成すべく努力するものだと思う。どの生徒も自分の力をどうにかして付けていきたいという気持ちを持っていることを最近とみに感じている。

## (4) どの領域も必要であるという認識

教師側に自分の得意、不得意分野があり、あまり得意でなかったり、面倒な指導になるとその分野の指導を避ける傾向がある。また、実践的コミュニケーション能力の育成のみの授業を行っているかどうか。私は1年次においては listening, speaking を中心には置いているが、reading, writing についても教科書の中からポイント的な箇所を取り上げ、指導している。特に writing においてはまとまりのある文章を書かせることが大変大切である。前にも述べたがとにかく生徒たちに活動する機会を多く与えていくことで、生徒は経験を通して基礎学力を獲得していくものである。4技能を統合的に指導していきたいものだ。

## 4. おわりに

基礎学力を生徒にどう保証していくか、これはこれまででも、また現在においても教師にとって大変重要なテーマであり続けてきた。生徒が自ら学ぼう、力を付けようとしているとき、生徒は着実に力を付けている。その学ぼうという意欲、態度を私たち教師が育成すること、そのことがまさしく基礎学力を保証していくことにつながるのだろう。

(参考文献：佐藤 学『学力を問い直す』岩波ブックレット、2001年)

特集 基礎学力を問い直す

# 教育機器を利用して 基礎学力の定着を進める

高木浩志  
(兵庫県宝塚市教育委員会)

## 新教育課程の実施にあたって

今年度は新教育課程の最初の実施年に当たり、また英語科が必修教科になったことで、英語科の先生方は大変な1年だったと思われる。一方で、「指導と評価の一体化」ということで、「絶対評価」の導入に当たっての苦勞も並々ならぬことも現場の先生方のお話や研修会の中での感想からも伺える。宝塚市教育委員会でも、委嘱研究会の中で、現場の先生方と「指導と評価の一体化」の研究を進めている。国立教育政策研究所作成の評価規準より評価基準表を作り、研究授業を実施して生徒の評価を進めるといった流れであった。この研究の成果は、宝塚市での研究発表大会で発表され、研究紀要としてまとめられることになっている。

さて、もう1つ今年度の中で問題になった「学力低下」について、「ドリル学習」か「体験学習」という選択において、英語科の中で考えた場合は、両方必要であるという結論が導き出されると思う。英単語・熟語のドリル学習や文法の学習も大切であるし、ALT等に指導されるペアワーク等の実践的なコミュニケーション活動も重要である。しかし、新指導要領の中では、英語科の週時間数は3時間に減っていることで、より効果的な指導が求められている。ここで、英語科の基礎学力を定着させるために利用が有効と考えられるのはLLやコンピュータを始めとする教育機器である。

### 1. LLの利用

LLは、英語学習と切っても切れない縁がある機器である。私が中学生の時代にも設置されており、英語の学習時にはよく活用したことを覚えている。

高校や大学時代にも使った記憶がある。対象が個別、グループや全体というように分けて使うことができる。一般的には対話練習によく使い、ビデオやOHCなどの視聴覚機器とアナライザーを合わせて使うことにより、効果をあげることができるのである。最近では、ALTとのチームティーチングでの利用をしたり、コンピュータを合わせたLLシステムも登場しており、生徒たちが興味を持ちながら、短い時間での効果的な学習を進めることができる。活用例としては以下のような場合がある。

#### (1) OHCの利用

(例：本文の一部を隠しての音読練習から暗唱へ)

音読練習をさせた後で、OHCを利用して、本文の一部を隠しながら、音読練習をさせていく。最終的には、暗唱へと導いていくことができる。音読練習をしている様子をLLに備え付きのカセットデッキで録音し、それを生徒にモニターして聞かせることで、間違っている点が把握できる。

#### (2) カセット、MD、ビデオカメラの利用

(例：教科書の対話からオリジナルの対話活動へ)

教科書の内容を理解させた後の段階で、録音された会話の内容を音読練習させる。生徒のそれぞれの様子をモニターして、発音やイントネーションのチェックもしっかりとする。最終的には、テープの会話の後で、次の内容が言えるような段階まで高めることが大切である。次に、教科書を参考にオリジナルの対話を作成させ、ビデオカメラで撮ったり、テープ等に録音したりするような応用にもつながる。

#### (3) ビデオの利用 (例：映画の活用)

映画は、教科書の中よりも生の会話を画面や音声を通して味わうことができる教材である。教科書の内容に合った映画を利用することにより、より教科

書の内容理解を進めることができる。私はよく教科書の読み物の内容に合った映画と、その映画の原作やシナリオを探しに行ったものである。映画で、適当なシーンとセリフの生の場面を見て聞き、英書でそのセリフを確認するという作業を教師の準備段階として果たしていた。生徒には、最初に映画を見せて、内容を理解させ、それからセリフをテープにとり、音読練習に利用した。また、OHCを利用して、セリフの中の適当な場所を穴埋めさせるような問題を出したりもした。アナライザーを利用しての内容のチェックに利用することもできる。ビデオの単独での利用も教室でよく行われている。

#### (4) CD や MD の利用 (例: 音楽の活用)

英語の音楽は英語のリズム、イントネーションや発音を学ぶのによい教材でもある。教科書の中にも、ビートルズやカーペンターズ等の曲が取り上げられている場合が多くなっている。これらの音楽を探し出し、MDに録音して、教材として利用する。昔はテープに録音していたが、巻き戻しに時間がかかり、苦勞をした思い出が多い。しかし、MDを使うと、一発で選曲できる。バーコードリピーターというCD装置も活用できる。音楽は、授業の流れの合間に入れたり、ほっと一息つける場面で使ったりして楽しむことができる。生徒たちも好きな曲を何回も聞きたがり、歌詞も覚えてしまう。教師も歌を生徒と一緒に歌う時も必要である。教室での利用も多い。

#### (5) アナライザーの利用

(3)でも触れたが、多岐選択問題に利用ができる機械である。アンケートや設問を出す際、生徒の回答を瞬時に把握することができる。昔は、教室の前に番号のランプがつくようになっていたが、最近はなくなっているようである。

## 2. コンピュータとインターネットの利用

インターネットの爆発的な広がりによって、コンピュータの利用は進んでいる。総合的な学習の時間や選択教科学習での発展的な学習の場合にも、利用されていることが多い。英語科の中でも、活用される場合が増えてきた。昔はドリル学習にコンピュータが使われていたが、現在ではコミュニケーションの手段としての利用がほとんどになっている。

#### (1) 電子メールの利用

昔は、電話か手紙でしか海外とのやり取りができなかったが、電子メールの発展によって、瞬時に安価にコミュニケーションを図ることができる。また、英語がわからない場合でも、翻訳ソフト等ができているために簡単にやり取りができるようになっている。しかし、手紙の書き方をしっかりと理解しておかないと、マナーに反するような文章を書く癖がつく恐れがある。英作文の能力もますます必要になると思われる。ALTとの電子メールのやり取りの練習は、第一段階として、活用すべきであろう。

#### (2) ホームページの利用

ホームページの検索によって、様々な情報を得ることができる。それは、日本や英語圏のみならず全世界の情報を得られるのである。一方で、ホームページを作成することも学習になる。私も選択教科学習の中で、取組んだことがあるが、英文でのホームページ作成は全世界向けのメッセージにもなるものである。これまでに学習してきたことを生かしての自分の意見やアイデア、そしてそれを掲載したホームページに対してのメッセージは、生徒たちにとっても生きた学習になるものである。

#### (3) テレビ会議

光ファイバーの進展やコンピュータの性能のアップにしたがい、国内を始めとして海外とのコンピュータを活用したテレビ会議が盛んになりつつある。お互いが顔を見ながらの交流ができるのである。国内にいながらも英語を使った学習ができ、海外での友だちも作ることができる。相互が行き合う国際交流も加われば、息の長い付き合いを進めていくことも可能である。ここで本当の英語学習ができる。

### 終わりに

英語学習も週3時間の授業だけでなく、選択教科学習や総合的な学習の時間等を利用するような幅広い学習を進めていくべきである。教育機器をいかに効果的に活用できるかは、教師の腕にもかかっているが、古いやり方に縛られるのではなく、意識改革をして進めていく必要があると思う。

## 「音読の実際」の巻

高梨庸雄 Takanashi Tsuneo  
(京都ノートルダム女子大学教授)

今回は音読に関する導入として、音読は文字によるコミュニケーションよりはるか昔から存在し、言語習得の面でも重要であるが、現在の英語教育においては、必ずしも効果的に行われているとは言い難いことを述べた。今回は、具体的に教科書の文章を例に音読の重要なポイントを考えてみよう。

The Sudan is a large country in northeast Africa. It is a country with great promise. But it also has great problems. Its people have suffered from war and hunger.

In 1993 Kevin Carter went there to work as a photographer. He wanted the world to know the facts.  
(NEW CROWN ENGLISH SERIES BOOK 3, LESSON 7, 三省堂)

### 1 基本事項

ここでは音読を始めるに当たっての基礎・基本を中心に述べることにしよう。

#### 1.1 内容語と機能語

単語には大別して内容語 (content words) と機能語 (function words) の2種類があり、内容語はそれ自体、内容を表現できる名詞、動詞、形容詞などで、通常、強勢 (stress) があるが、前置詞、接続詞などの機能語には特別な場合を除き強勢はない。特別な場合とは対照 (contrast) や強調のためか、あるいは文末にくる場合などである (基本事項 1.4 にその一例を挙げてある)。

The Sudan is a large country in northeast Africa.

強勢は厳密に言えば音節 (例: country には coun-try と2つの音節がある) にあるのだが、音節では母音が中心になるのが普通なので、強勢符号を便宜的に母音字の上に置くことが多い。

#### 1.2 話者の気持ちとイントネーション

文のイントネーションは、その文の強勢のある最後の単語のところで変化する。しかし、これはあくまでも原則で、強勢やイントネーションでは、話し手にとって特別な意図や感情を表すことが多いので、個人差も出てくる。その例として次の文を考えてみよう。

I love you. これは一般的なイントネーションで、「私があなたを愛しているということをあなたにわかってもらいたい」場合である。

I love you. これは「私が愛しているのはあなたであって他の女性 (あるいは男性) ではない」ということである。

I love you. この場合は、「あなたを愛しているのは私であって、彼 (あるいは彼女) ではない」という意味になる。

#### 1.3 日英リズムの相違

英文のリズムは強勢のある音節と強勢のない音節で構成される。英国の詩人ワーズワースの詩の1行に I wandered lonely as a cloud. というのがある。イタリック体の部分が強勢のある音節である。つまり、弱強のリズム単位が4回現れる。このように英語の定型詩には強勢のある音節と強勢のない音節 (その数の組み合わせはいろいろある) が繰り返されることによってリズムができる。会話文や散文の場合には定型詩ほど規則正しく現れるわけではないが、強弱のリズムが基本になっていることには変わりない。

① *The Sudan is a large country in northeast Africa.*

② *It is a country with great promise.*

上の2文でイタリック体の部分は、普通、強勢

を受けない部分である。その中で①の is a, ②の It is a を例に考えてみよう。俳句に親しむ日本人の音韻感覚からすると、It is aの方が1語多い分だけ読むのも長くかかると思うかも知れない。しかし、強勢のない音節が続いても一気に読むのが英語のリズムであるから、音読する時の長さはほとんど同じである。

しかし、日本語のリズムは(短)音節(mora)のアクセントが高いか低いかによって決まる高低のリズムであり、「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」という芭蕉の俳句を音読するとき、1音1音ほぼ同じ長さで読む。英語のように連続する弱音節を一気に読むことはない。

#### 1.4 機能語が強勢を受けるとき

ここでは機能語が強勢を受ける場合を見てみよう。

I'm from Japan. Where are you from?

Are you for or against the plan? (あなたはその計画に賛成か反対か)

上の例のほかにも機能語が強勢を受ける例はいろいろあるが、辞書を引いても強勢符号は付いていないことからわかるように、強勢なしで用いられる場合が機能語の普通の用法であるから、逆に言うと、強勢があるのは特別な場合なのだ、と考えた方がよい。

## 2 発展事項

### 2.1 書き手の気持ちになって読む

上記のような音声学の基本的知識は最小限必要であるが、もっと大事なことは、語句や文で表現されている内容に作者はどんな思いを込めているのだろうかを考えて、それが聞き手に伝わるように音読することである。比喩的になるが、書いた人の思いを自分の思いとして聞く人に伝えるには、どこを強調し、どこを静かに読むかを考えることである。冒頭に引用した3年7課 A Vulture and a Child の文章には、It is a country with great promise. But it also has great problems. と述べられている。promise と problems という、いわば発展途上国の共通の問題が取り上げられている。その対照をはっきりと伝えることが大切である。そのためには、Its people have suffered from war and hunger. という文を、

内戦からくる飢饉に苦しむスーダンの人々の気持ちを自分の気持ちとして読むことが必要である。

### 2.2 つなぎの段落

段落と段落のつなぎ役となる段落がある。英語では Transitional paragraph と言って、文字通り「移行」の段落で、In 1993 Kevin Carter went there to work as a photographer. He wanted the world to know the facts. は次ページの最初の段落へ移行するための「つなぎ」の役割を果たしている。したがって音読では、ナレーターとして淡々と読むのがよい。

### 2.3 情景を目に浮かべることができるように読む

One day he saw a child. She was lying on the ground. He knew why she was there: hunger. Suddenly a vulture appeared. He pressed the shutter. This is the photo.

この6つの文は、映画の連続シーンのように、1カットずつ目に浮かべることができる。音読ではこれをどう読み方に反映させるかが鍵となる。最初の3文は末尾のピリオドに心持ち長めのポーズを置いて、聞き手が「次に何が起こるのだろうか」とサスペンス(suspense)を持って聞くように、1文ずつクリアカットに読んでいく。Suddenly a vulture appeared. He pressed the shutter. はこの段落のヤマであり、2文の間のポーズは非常に短く読み、一息おいて、ゆっくりと This is the photo. と読み終える。

## 3 音読と Listening

ヒアリング、リスニングと仮名で書く場合、同じ意味で使っている人もいるが、英語でいう Hearing, Listening には根本的な違いがある。前者は聴覚に異常がない限り、生まれつき備わっているのに対し、後者は習得(acquire)しなければならないものである。母語の場合、乳幼児の言語中枢は Listening を通して母語の音韻、統語、語彙を習得すべく活発に働いている。外国語の場合、それを習得しようとするならば、時に母語からの干渉に悩まされながら必死になって Listening をする必要がある。テープやCDもいいが、できれば教師の肉声で音読してあげたい。

# 教科書を創造的に活用するために [2]



## 応用編：私の授業構成

野澤重典 Nozawa Shigenori (長野県更埴市立西中学校)

先生方は、「LESSON 8のセクション2をどのように教えていますか?」と問われたとき、「私はこうやっています」あるいは、「こうすればいいと思いますよ」と明快に答えることができるでしょうか。また、「その展開はどのレッスン、どのセクションでも原則同じですか?」と問われたとき、何と答えるでしょうか。大変基本的な問いですが、改めて問われると、答えるのは難しいと思いませんか。私たちの周りには、研究会が数ありますが、このような基本的な内容についてあまり深まった議論がなされていないのが現実ではないでしょうか。

本稿では、前稿で述べた教科書を創造的に活用するための教材研究を踏まえて、できるだけ多くのレッスンで実現可能であろうと思われる50分の授業構成と LESSON の全体のまとめ方について述べたい。そして、それを生かした定期テストの例についても若干言及したい。今回は *NEW CROWN* 2年の LESSON 8 を例に取り上げる。

### 1. 目標と生徒に期待する表現の具体化

50分の授業展開を構築する上で最も大切なことは、何と言っても、その授業で目指す目標を明確にとらえることである。本テキストでは「比較級・最上級」がターゲット・センテンスになっているが、テキストの題材を重視し、学習した表現がある場面の中で使えるようにすることを主目的とする授業では、「比較級・最上級の用法を理解し、それを用いて自己表現できる」ことを目標とするのは本意ではない。むしろ、テキストの題材であるインターネットの利便性と注意点について自分のことばで表現できることを目標にしたい。つまり、セクション1・2の目標は、「インターネットの利便性について英語で表現できる」ことに置き、セクション3では「イ

ンターネットの情報を受け取る時の注意点について英語で表現できる」ことに置く。つまり最終的に目標としたいことは、どのレッスンであろうとも「生徒がその題材に関連した内容について英語で自己表現できるようになること」である。そしてそれをできるようにすることが教師の責任と考えたい。

次に教師が行うことは、どのような表現を生徒に期待するのか、その具体を明確にすることである。それを明確にするには前回の教材研究と生徒理解が大切である。前稿の教材研究の視点を生かし、また、生徒の姿を思い浮かべながら、生徒に期待する表現を記述してみよう。たとえば、Internetの便利さは次のようにまとめられる。

The Internet is very useful, because

- ① it is like a library.
- ② we can get a lot of information with it.
- ③ it is the fastest and easiest way to communicate with people around the world.
- ④ we don't have to go to the library.
- ⑤ we can stay home and get a lot of information.

この例が示すように、①～③の文は教科書を活用しており、④⑤は教師が教材研究によって作りたい創造的な文である。年間を通して④⑤のような文をインプットしてもらえる生徒と教科書通りの文にしか接することができない生徒では、表現力で大きな差が生まれてくるであろう。教材研究の重要性が指摘される所以である。生徒の実態に応じて、もう少し頑張らせたいと考えれば、例えば、次のような TASK を与えるとよい。

〈TASK: 久美になったつもりでその日の日記を書きなさい〉



I used the Internet at school today. The Internet is very useful, because it is the fastest and easiest way to communicate with people around the world. The Internet is like a library, because we can get a lot of information very fast. I found that the ostrich is the largest bird in the world, but there were no moas now. I want to use the Internet more.

このように生徒に期待するゴールを設定した上で、次にこれを実現できる授業構成を考えたい。

## 2. 授業構成

そこで次のような授業構成はいかがであろう。ここでは LESSON 8 のセクション 3 を例に紹介するが、ほとんどのレッスンで同様の構成が可能であると考えている。

### (1) 前時のターゲット・センテンスの復習

テキストの題材内容を重視しているが、ターゲット・センテンスの指導も無視できない。三省堂から出ている『ドリルブック』などを活用したい。負担の大きい家庭学習でもなく、5分程度で答え合わせができ、基礎・基本の定着のためにもよい教材であると考えている。

### (2) 前時の自己表現・要約の表現

前時学習した内容について英語で表現させる。スピーチの形式がよい。ここでは、前のセクション 2 の内容になるので、生徒には次のような発表が求められる。

< TASK: インターネットの利便性について英語で表現する >

Do you often use the Internet? I do. The Internet is really useful, because it is like a library. We can get a lot of information with the Internet. And it is the fastest and easiest way to communicate with people around the world.

このように生徒は前のセクションの内容について英語で話す。筆者は毎時間 7～8 名の生徒を指名し、名簿に ABC の評価をつけている。学期末にはその結果を総括する。

### (3) 本時のテキストの内容理解

セクション 3 のテキストの内容を Oral Introduction や Tape を聞かせるなどして内容を理解させる。この方法については本稿では紙面の関係で割愛する。

### (4) 新出語の発音練習とテキストの音読練習

音読までの過程についても紙面の都合で割愛する。なお、筆者は、事前に家庭学習として、対訳ノートを作るよう指示してある。テキストを見ながら音読するよりは、日本語の訳を見ながら英語で音読する方がよいと考えているからである。

### (5) 自己表現あるいはテキストの要約

セクション 3 はインターネットを使うときの注意が題材となっているので、それをまとめておきたい。前稿の教材研究の視点に沿ってまとめると次のような表現が可能であろう。

We have to be careful when we use the Internet, because

- ① we have to judge the information carefully.
- ② information may not be reliable.
- ③ some information may not be right.
- ④ we have to choose the best information.

ここでも ①② のように、テキストの文を用いた表現と、③④ のように創造的な表現の両者を生徒から引き出す。このようなまとめを行い、次の時間 (2) の段階で別の 7～8 名を指名し、スピーチ形式で発表させる。

## 3. LESSON 全体のまとめ

学習した内容・表現の定着と発展を図り、LESSON 全体のまとめとするために、筆者は次のようなプリント教材を作成している。

### LESSON 8 Computer Communication まとめ

※あなたはインターネットを使ったことがありますか？ インターネットはとても便利ですが、注意しなければならないこともあります。コンピュータ部に所属する博子さんのスピーチを空欄を補充しながら読んでみましょう。

Hello, friends. I am Hiroko. I am a ( ) of the computer club. I often ( ) the Internet. I will tell you about the Internet today. Please enjoy reading.

The Internet is very ( ), because we can ( ) a lot of information from it. Last week I ( ) to know about moas. So I used the Internet. It said, "Moas were ( ) than ostriches. They ( ) in New Zealand, but they are all ( ) now." So we ( ) see any moas now. There are no moas in the world. It ( ) only a few minutes ( ) find this information. The Internet is really useful, ( ) it? We don't have to ( ) to the library. We can ( ) home and get these information very ( ) and easily.

Do you have any ( ) in foreign countries? I do. I have a friend in London. She is my ( ) pal. When we communicate with each other, we don't use ( ), because it takes a lot of time to exchange. Instead, we use the Internet. It is really useful. We don't have to go to the ( ) office. We can stay home and just ( ) messages. I think that the Internet is the fastest and the easiest way to ( ) with people ( ) the world.

But we have to be careful ( ) we use the Internet. We can get a lot of information with the

Internet. But those information may not be ( ). They sometimes have wrong information. So we have to ( ) the best information. Information may not be always ( ). We have to ( ) the information ( ). Thank you.

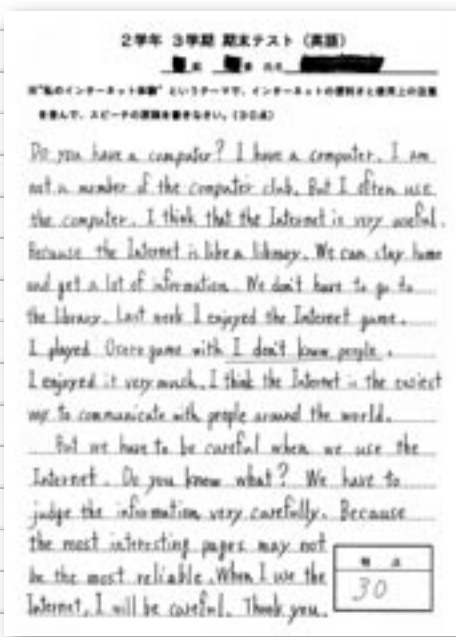
このようにすると、生徒は「私のインターネット体験」というテーマを与えられたとき、この博子さんの例を参考にスピーチができる。

#### 4. 定期テスト

テストは学習したことを評価することが原則である以上、重視して学習したことは定期テストにも反映させたい。そこで、本校ではスピーチの原稿書きを出題している。本レッスンの場合、「私のインターネット体験というテーマで、インターネットの有効性と注意点について英語で書きなさい」という形式の出題になる。解答用紙は10行～20行、配点は15点～30点としている。下は、生徒作品である。

#### 5. まとめ

ここで示したように、我々は、テキストの題材内容を重視し、「生徒がテキストの内容を理解し、それを音読でき、最後はテキストの内容について英語で表現できるようにする指導」をできるだけ多くのレッスン・セクションで実現したいものである。



# Just Now

## ここが違う！

### 小学校の「英語活動」と 中学校の「英語科」

直山木綿子 Naoyama Yuko  
(京都市総合教育センター)

#### 1. はじめに

小学校の「英語活動」は、試行の段階から、系統的・計画的に実践を積み上げる段階に入ってきたといえます。それに伴いますます小学校での英語活動が、中学校での英語教育にどのように結びついていくのかという、小中の連携が課題となってきました。小中の連携を図るためには、まず、小学校の教員と中学校の英語科担当教員が互いにどのような内容をどのような方法で指導しているのかを知り合うことが大切です。そこで、小学校では実際にどのように英語活動が進められているのかをご紹介します。

#### 2. 小学校での英語活動のねらい

中学校の英語教育のねらいは、学習指導要領（外国語編）によると、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」ことです。すなわち、「聞く・話す・読む・書く」の4技能にわたって、文法規則や語彙について学習したことを生かし、場面に応じて、実際に英語を使える能力の育成がねらいとなります。

一方、小学校の英語活動は、「小学校英語活動実践の手引」（平成13年文部科学省：以下「手引」）にも書かれているように、言語習得を主な目的とするのではなく、「英語に対する興味・関心と、英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する」ことをねらいとしています。ですから、小学校では、中学校で学習することをそのまま前倒して学習するものではありません。

では、このねらいを達成するためには、小学校の英語活動では、どのようなことを、どのような方法で進めるのでしょうか。

#### 3. 小学校での英語活動の内容と方法

ご承知の通り、コミュニケーション能力はコミュニケーションを通して獲得されます。ですから、小学校での英語活動のねらいを達成するためには、やはり、英語によるコミュニケーションを児童に体験させることが必要となります。「手引」によると、「子どもの言いたいこと、したいこと、日常生活に身近な事柄」を題材に活動が組み立てられ、「音声中心に、逐一日本語に訳したり、無理に覚えたり、細かい誤りを気にしたりせずに」、活動が進められます。

例えば、中学校英語の学習内容は、be動詞および一般動詞の肯定文、疑問文・応答、否定文、疑問詞付き疑問文、三人称単数現在形のように、文構造によって学習内容の順が決まってきます。ところが、小学校では、文構造によるのではなく、子どもが言いたいこと、興味のあることが中心となって、学習内容の配列が決められていきます。

学習の方法については、指導者とも大きく関わってきます。「総合的な学習の時間」における取組みですから、「地域や学校、児童の実態」に応じて、「児童の興味・関心等に基づく学習」を創意工夫することが求められ、児童のことをよく理解している学級担任が中心になって英語活動を進めることとなります。ただ、「手引」でも「基本的には学級担任が行う」としていますが、英語活動を進める際、「英語に直接触れたり、外国の生活・文化に慣れ親しむという趣旨から、外国語指導助手の活用や多様な授業展開

を可能にする協同授業などの授業形態の工夫も必要」としています。このことから、多くの学校では、児童に英語でのコミュニケーションを体験させ、英語を積極的に使う動機付けをするために、学級担任と外国語指導助手とのチームティーチングをしたり、ネイティブのゲストティーチャーを招いたりして、英語活動を進めています。

#### 4. 京都市における小学校英語活動の取組み

以上のことを踏まえ、京都市でも小学校における英語活動に取り組んでいます。まず、京都市における小学校英語活動の取組みは、平成6年度より、京都市立永松記念教育センター（平成15年度より「京都市総合教育センター」に改名）研究課において始まりました。指導計画の作成と教材の開発、学級担任と外国語指導助手とのチームティーチングの在り方などについて研究を進め、その成果は、毎年センターから発行される「研究紀要」にまとめられています。そして、平成14年度には、小学校の先生たちで組織された小学校英語活動実践グループ研究会の協力を得て、「小学校英語活動 指導計画と活動事例集（試案）」が作成されました。これは、第3学年から第6学年までの4学年分、各学年8～10ユニット、1ユニット3～7時間で構成されています。また、各校でこの試案を使って実践を行う

時	学習内容	活動
1	I like ~ . <u>Do you like</u> ~? Yes / No. <u>What</u> ~ do you like?	・カルタ取り ・はえたたきゲーム ・What color do you like?
2	<u>What do you want</u> ? ~ , please. Thank you. You're welcome. <u>Are you sure</u> ? <u>Is this right</u> ? <u>Sure</u> . Yes / No. <u>Here you are</u> .	・色板当て ・色と形のビンゴゲーム
3	<u>What / How many</u> ~ do you want? ~, please. Here you are. Thank you. You're welcome. <u>What kind of face is this</u> ? <u>Is this</u> ~? Yes. / No.	・色板で顔作り ・どんな顔に見えるかな?
4	<u>What do you want</u> ? <u>I want</u> ~ , please. Thank you. You're welcome. <u>What kind of face is this</u> ? <u>Is this</u> ~? Yes / No. Here you are. ~ , please.	・歌：“Head, Shoulders and Knees” ・福笑い（全体）
5	What ~ do you want? ~ , please. Here you are. Thank you. You're welcome. <u>What kind of face is this</u> ? <u>Is this</u> ~? Yes / No. Right. Up. Stop. More. ~, please. <u>Be quiet</u> .	・歌：“Head, Shoulders and Knees” ・福笑い（ペア）

際に必要な教材も各ユニットごとに作成され、平成14年より各校への貸出しも行われています。

下に示すのは、試案を使った具体的な第3学年対象の実践例です。

#### 5. おわりに

小学校における英語活動は、教科書も、カリキュラムもない中、外国語指導助手に任せきりから、少しずつ、学級担任が中心になって工夫し、進めるものが増えてきています。小学校の教員は、その養成課程で英語指導の専門的な教育を受けていないことや、英語を教える専門的な知識やその指導法も身に付けたりする機会がなかったことから、小学校での英語活動に対する不安の声を耳にすることもあります。しかし、「英語が苦手だからこそ、子どもと一緒に英語を勉強します」と、英語活動に熱心に取り組んでおられる先生が増えてきています。そのような先生が進められる英語活動では、「覚えなければ！練習しなければ！」というスタイルではなく、「何かしているうちに、自然に英単語が口から出てくる」というスタイルで、子どもたちが英語を聞いたり、話したりすることを楽しんでいます。

そのような子どもたちの姿を、校区内の小学校に是非見に行っていただくことが、小学校の英語活動がうまく中学校の英語教育に結びつく第一歩だと思います。



外国語指導助手が児童の指示で福笑いをしている様子



ペアで助け合いながら福笑いで作った顔を紹介している様子

# Intercultural communicative competence [2]

Lynne Parmenter

(Associate Professor, Waseda University)

## Introduction

The aim of this series of three articles is to explore in greater depth one of the most common rationales given for teaching and learning English in schools: in order to communicate with people of other cultures. In the first article of this series, the concept of Intercultural Communicative Competence (ICC) was introduced. Recent research on ICC was mentioned, and the first two elements of ICC, namely, 'knowledge' and 'skills' were discussed. In this second article, I would like to introduce the other two competences necessary for the development of ICC, which are 'attitudes' and 'critical cultural awareness'.

## Attitudes

Attitudes are crucial to ICC, as well as playing a very important part in motivation for foreign language learning. In order to be successful intercultural communicators, students need to develop attitudes of openness to otherness and curiosity about other cultures and people. Openness and curiosity are often displayed by beginning foreign language learners, but unfortunately tend to risk being 'lost' in the struggle to memorise vocabulary and grammar structures for entrance exams. In addition, it is necessary that students are willing to question their own cultural assumptions and beliefs and willing to accept other ways of acting and thinking without prejudice or discrimination. Most people would agree with the desirability of such attitudes, but many educators wrongly assume that such attitudes will be developed naturally through the mere process of foreign language education. In actual fact, foreign language education can actually perpetuate students' prejudices and biases about other cultures, particularly if textbooks and teachers emphasise dichotomous differences between the native and foreign culture and use these dichotomies to 'prove' the 'uniqueness' of the native culture. Foreign language teachers thus have a responsibility to make sure that the

content of their classes, and the way that this content is taught and learned, promote positive rather than negative attitudes towards ALL other cultures and people (not only Western culture and American people).

## Critical cultural awareness

'Critical' in the term 'critical cultural awareness' does not have a negative meaning. In this sense, it means the ability to think about things actively and intelligently rather than just accept them passively without question. The development of critical cultural awareness involves the ability to identify and interpret values in another culture, the ability to critically analyse and evaluate cultural practices or documents from another culture, and the ability to interact and mediate in intercultural exchanges, drawing on one's knowledge, skills and attitudes. In other words, it means being able to go beyond surface stereotypes and false images of a culture, e.g. 'All Japanese people wear kimono and eat raw fish', to be able to see the deeper levels of meaning in a society or culture. This critical attitude to one's own and other cultures is a key element of ICC, and it is possible to develop it from the earliest stages of foreign language learning.

## Conclusion

In the first article and this article, therefore, we have looked at the four elements of Intercultural Communicative Competence; which are knowledge, skills, attitudes and critical cultural awareness. In the third and last article, the focus will be on the practicalities, possibilities and problems of implementing aspects of ICC in the foreign language curriculum in Japan.

## References

Byram, M. (1997) *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Clevedon: Multilingual Matters

## 平成 14 年度版 NEW CROWN ENGLISH SERIES のアンケート結果

昨年 10 月、現在 NEW CROWN をご使用いただいている学校を対象に教科書についてのアンケートを実施しましたところ、467 校 549 人の先生方よりご回答をいただきました。長大なアンケートにご回答いただきました先生方に、この場を借りてお礼を申し上げます。

ここに集約結果（教科書に関する質問事項中心）をご報告させていただきます。記述欄では、☆、○、・印を使用して回答数の目安を示しています。（☆：100 を越える特に多かったもの、○：20 を越える多かったもの、・：その他の主な意見）

1. 週 3 時間授業に対応してレッスン数を減らす等、分量の削減を行いました。いかがでしたでしょうか。

ア 削減されすぎている	65
イ ちょうどよい	315
ウ まだ不十分	95
エ その他	48

「エ その他」で挙げられたもの：

○LET'S TALK などの中に表現事項が入っていてやりづらかった。

- ・内容はちょうどよいが動詞などが少なく感じる。
- ・週 3 時間では厳しいが、これ以上の削減はよくない。

2. 現在、授業の進み具合はいかがでしょう。

ア ほぼ予定通りに進んでいる	220
イ 少し遅れぎみ	273
ウ かなり遅れている	46

時間がかかりすぎたところ、やりにくかった所：

- ・行事などで時間数が確保されていないために遅れ気味。
- ・Let's ～シリーズは全部やると時間がかかる。

3. 1 年生の LET'S START は段階を踏んだ導入になっていますが、いかがでしたでしょうか。また、小学校から英語に触れてきている生徒が増えている中で、入門期についてご要望がありましたらお書き下さい。（1 年生ご担当の先生のみ）

ア 使いやすい	87
イ ふつう	209
ウ 使いにくい	39

LET'S START に対するご要望：

○フォニックスをもっと取り入れた導入にしてほしい。

4. 本課レッスンの題材で、よかったもの、よくなかったものがありましたらお書きください。（回答数が 15 以上のものを掲載しています。）

■ 1 年

よかったもの：

- L. 5 Alice and Humpty (47)
- L. 6 School in the USA (40)
- L. 8 They Are Partners (26)

よくなかったもの：

- L. 5 Alice and Humpty (38)
- L. 4 I Am a Champion (21)

■ 2 年

よかったもの：

- L. 6 Speech — 'My Dream' (43)
- L. 4 Kumi Talks about Korea (41)
- L. 9 Landmines and Children (36)
- L. 5 The United Kingdom (30)
- L. 7 Ainu (23)

よくなかったもの：

- L. 5 The United Kingdom (15)

■ 3 年

よかったもの：

- L. 6 I Have a Dream (114)
- L. 7 A Vulture and a Child (49)
- L. 3 Hiroshima and Nagasaki (40)
- L. 4 Save the Earth (29)
- L. 5 Show and Tell (18)

よくなかったもの：

- LR 1 Hikoichi's Living Umbrella (19)
- L. 1 Tom's Tricks (16)

5. 文型・文法事項の配列はいかがでしょう。扱いにくかった項目がありましたらお書きください。

ア 扱いやすい	104
イ ふつう	317
ウ 扱いにくい	59

ご意見：

- ・3年の関係代名詞は which, who からの方が導入しやすい。
- ・レッスンの数は減っているが、LET'S TALK 等の中で新出項目が扱われているのでやりづらかった。
- ・1年生の初め、be 動詞と一般動詞の配列がやや混乱する場合がある（一般動詞導入後に He is を扱うなど）。

6. LET'S TALK, LET'S LISTEN, LET'S WRITE, LET'S READ の使い勝手はいかがでしたでしょうか。使いにくい点がありましたら、お書きください。

■ LET'S TALK

ア 扱いやすい	221
イ ふつう	244
ウ 扱いにくい	64

ご意見：

- 基本的な会話表現としては扱いやすいが、文法的に新しいことが取り込まれていて、大変なところもある。
- ・ALT の授業で活用できる。
- ・会話の練習として、とてもやりやすい。
- ・身近で実践的な日常表現が出ていてよい。

■ LET'S LISTEN

ア 扱いやすい	244
イ ふつう	241
ウ 扱いにくい	29

ご意見：

- ・時間が足りず、あまり活用できていない。
- ・簡単すぎる。

■ LET'S WRITE

ア 扱いやすい	140
イ ふつう	278
ウ 扱いにくい	94

ご意見：

- ・時間が足りず、扱うのは難しい。
- ・書く活動は生徒の実力を考えるとやや高度である。
- ・1つ前の Lesson と関連付けて作られているので、復習しながらできるのがよい。

■ LET'S READ

ア 扱いやすい	125
イ ふつう	307
ウ 扱いにくい	82

ご意見：

- ・未習語が多く、時間的に扱うのが大変である。
- ・新出文法、重要表現などを入れないで、読み物として生徒が気楽に楽しめるものにしてほしい。
- ・1年の前半にある詩は扱いづらい。
- ・内容がつまらない。
- ・もう少し、生徒が興味を持つ内容にしてほしい。

7. LET'S COMMUNICATE! (練習問題) はどの程度お使いになっていますか。また、どのようにお使いになっているでしょうか。(導入、あるいはまとめとして使うなど。)

ア ほとんど使っている	237
イ たまに使っている	202
ウ ほとんど使っていない	90

使い方：

- まとめ、復習として使う。
- まとめとして使う。
- ・導入として使う。

8. Rhythm Corner の使い勝手はいかがでしょう。また、音声教材にリズム音声も入れていますが、いかがでしたでしょうか。

ア 使いやすい	111
イ ふつう	269
ウ 使いにくい	129

ご意見：

- 音楽に合わせるのは楽しくてよい。
- 1年生には使いやすいが、学年が上がると、使いにくい。
- ・使っていない。

■リズム音声について

ア 使いやすい	207
イ 使いにくい	100
ウ 使っていない	172

ご意見：

- ・生徒がのりにくく、あまり声が出ない。
- ・楽しくやれる。口ずさんで出てくる。

9. 教科書のイラストやページレイアウト・デザインはいかがでしょうか。

ア よい	245
イ ふつう	231
ウ よくない	35

ご意見：

- 以前のキャラクターの顔が生徒に好まれていたの  
で、変更は残念。
- ・とても感じがよい。
- ・カラー写真、カラーイラストが多く、見やすく楽しい。
- ・絵が多過ぎる。

10. 通常の授業では、教科書を使った導入はどのようにされているでしょうか。

ア 新出文型・文法事項（POINT）や 語句の説明や簡単な導入をしてから、 教科書本文に入る	220
イ 新出文型・文法事項（POINT）を 使った言語活動を行い、そのあと で教科書本文に入る	267
ウ 教科書本文の「読み」を先行させ、 そのあとで新出文型・文法事項 （POINT）を説明する	74

ご意見：

- LESSONによって（文法事項によって）、学年  
によって異なる。

11. 今後、学習指導要領の範囲を超える「発展的な学習内容」を教科書に盛り込むことができるようになりますが、どのような内容が盛り込まれることを希望されるでしょうか。

ア 発展的な語彙	112
イ 発展的な読み物	203
ウ 発展的な言語活動	273

ご意見：

- ・希望しない。
- ・語彙が大切だと思う。

12. 選択教科の英語では、どのような授業をされているでしょうか。また、このような教材があったら、というようなご要望がありましたらお書きください。

■現在行っている授業：

- 基礎の復習、補充学習、問題練習
- 英検対策
- 映画を使った授業
  - ・長文読解、読み物
  - ・英語の歌、音楽

- ・ALT との Team-Teaching
- ・会話、Speaking
- ・Listening
- ・ゲーム（早口ことば、ビンゴ、クロスワードなど）
- ・基礎英語（ラジオ）
- ・習熟度別指導

■ご要望：

- ・基礎的・発展的読み物
- ・会話教材

13. NEW CROWN をお使いいただき、最も評価できる点、最も不満な点はどこでしょうか。

■評価できる点：

- ☆題材がすぐれている。
- 内容が日本語で読んでも面白く興味深いものが多い。
- 題材が多方面にわたり、生徒の世界が広がると思う。
- ・文型・文法事項の配列がよく教えやすい。
- ・副教材、指導書、補足資料類が豊富である。
- ・LET'S TALK など会話表現が学びやすい。
- ・イラスト・写真など親しみやすく見やすい。
- ・無理なく多くの知識を身に付けることができる。

■不満な点：

- ・内容が高尚すぎて難しいことがある。
- ・教師の準備が大変。
- ・内容の幅は広いが浅い。
- ・文法事項が扱いにくい。
- ・全体の分量が多い。
- ・難しい語句・表現が多い。

**NEW CROWN ENGLISH SERIES**

（平成 15 年度用）修正箇所のお知らせ

（TEACHING ENGLISH NOW 創刊号に掲載しました修正箇所の追加です）

□ BOOK 2

ページ	行	修正箇所	修正内容
11	2	日本に住むジュ ディが、きのう の様子を話して くれました。	日本に住むジュ ディが、きょう 1日の様子を話 しています。
	タイトルの 右の イラスト	差しかえ	ジュディが家で 友だちと話して いるイラスト



## コーパスが英和辞典を変える

《問・かっこ内の語から適切な語を1語選びなさい。

My opinion is different (as / from / with / to / than) yours.

(私の意見はきみの意見とは違う)

先生方にとってはもちろん、授業でbe different fromとセットフレーズでしっかり暗記している受験生にもごくごく簡単な問題でしょう。高校の教科書でも、また大学入試でも定番といっていい表現だと思えます。ただ、この文章、教科書や試験問題の中にしか存在しない英文、いかにも受験英語といった類の英文でないことは、先生方もご存じの通りです。ビジネスの会議でも口にする機会がありそうですし、友人と野球の話をしている時に出てきてもおかしくない、ごく普通の文章です。つまり、日常のコミュニケーションに必要なフレーズだと言えそうです。この当たり前の英文を見ていて、ふと疑問に思われることはないでしょうか。他の選択肢はどのようなだろう、まったく使えないのだろうか。また、米英差の有無はどうだろうか、と。こんな疑問が生じた時はコーパスに当たってみます。

「コーパス」とは、米英で実際に使われている英文テキストを大量に

収集し、コンピュータで解析できるようにしたもので、いわば「生の英語」のデータベース。

専用のソフトウェアを用いてそのコーパスでdifferentを検索してみると、たちどころに用例がずらりとコンピュータの画面に並びます。あとは、直後にどのような語が来るかを見ていくことになります。すると、どの語が、どの意味が、どの表現がもっともよく使われるのかははっきり見えてきます。また、各データの出典を見れば、米英差、話し言葉と書き言葉の差の有無も、「印象」ではなく、数値的な裏付けをもって確認することができます。こうして確認できたよく使う表現・意味が項目の1番目に載っていれば、辞書を引くのが苦手な方も的確にそしてすばやく求める意味を見付けられるはず。その配列の判断基準となる「よく使われるかどうか」を客観的にはかるためのツール、それがコーパスです。

コーパスが変わるのは要素の配列順だけではありません。コーパスはまさに「生の英語」データの宝庫ですから、それを丹念に見ていけば、ネイティブが日常ふつうに使っているような、自然な英語表現がいくら



## ウィズダム英和辞典

井上永幸・赤野一郎  
[編]

定価 3,100 円＋税

でも目に入ってきます。辞書は単なる受験や学習のためのツールで英文読解に使えばそれでいい、というのは過去の話。今では辞書もコミュニケーションに使える「発信型」であることを求められているのは、先生方がもっともよくご存じでしょう。口語表現や生活用語の充実、コミュニケーションツールとしての辞書の機能を高めてくれるはずです。コーパスを全面的に利用した初めての英和辞典として先頃発行しました『ウィズダム英和辞典』の、たとえばbuyやseatの項目に、その成果の一例をご覧いただけるかと思えます。

ところで、最初の設問、かっこ内の選択肢に使えるものはあるのでしょうか。答えをご存じの先生方も、ぜひ一度『ウィズダム英和辞典』のdifferentの項をご覧になってみてください。『ウィズダム英和辞典』編集部

## ■三省堂 小学校英語活動のためのセミナー 2003

日時：7月29日(火) 10:00～17:00

場所：三省堂文化会館(東京・新宿区)

内容：ワークショップI：三浦邦子(文京区立誠之小学校)  
ワークショップII：永井淳子(東横学園小学校)  
ワークショップIII：金森強(長崎ウエスレヤン大学)  
講演：渡邊時夫(清泉女子学院大学)

参加費：5,000円 定員：100名

お問い合わせ：三省堂セミナー事務局 TEL. 03-3230-9241

## ■英語教師のための英語ブラッシュアップ・ワークショップ 2003

日時：8月19日(火)・20日(水) 10:00～17:00 2日間

場所：三省堂文化会館(東京・新宿区)

内容：中学校での英語指導経験を持つALTと英語教育を語りながら、英語運用能力を高めるワークショップ。目的、経験、悩みを共有する複数のネイティブとともに、英語にとどっぷりつかる2日間。

参加費：25,000円 定員：40名

お問い合わせ：三省堂セミナー事務局 TEL. 03-3230-9241

## TEACHING ENGLISH NOW

2号

2003年  
5月1日発行  
定価 80 円  
(本体 76 円)

編集・発行人：渡辺孝映  
発行所：株式会社三省堂  
〒101-8371 東京都千代田区三崎町 2-22-14  
電話 (03) 3230-9422(編集)  
振替 東京 00160-5-54300  
[NEW CROWN ホームページ]  
<http://tb.sanseido.co.jp/newcrown/index.html>  
印刷：三省堂印刷株式会社  
〒192-0032 東京都八王子市石川町 2951-9  
電話 (0426) 45-6111(代)

## 編集後記

外国語を学んで胸躍る瞬間は、「自分のことばが相手に通じたとき」、あるいは「読んで(聞いて)わかったとき」ではないでしょうか。この感覚が楽しさを生み、学ぶ意欲につながっていく…。新年度を迎え先生方の新たな挑戦が始まります。ご意見・ご感想はこちらまで。 [newcrown@sanseido-publ.co.jp](mailto:newcrown@sanseido-publ.co.jp)

# 三省堂中学NEW CROWN ENGLISH SERIES

## ① ② ③

## NEW CROWNの教材

学校でご使用いただく商品

### 教師用指導書

より教えやすく、使いやすく、完璧なまでのサポート！

### Teacher's Manual ① ② ③

[5分冊＋CD2枚＋CD-ROM1枚]

- ①解説と指導 ②授業案集 ③ALT Team-Teaching Manual
  - ④言語活動ワークシート集 ⑤Teacher's Book
  - ⑥音声CD1(12センチ) 音声CD2(12センチ) 指導用CD-ROM
- 各学年 B5判 19,000円



### Teacher's Manual (別冊)

### アクティビティ アイディア集 ① ② ③

生徒が楽しく授業に参加でき、コミュニケーション能力の育成に効果的な「指導用教材」です。  
各学年 B5判 1,900円

### 授業を効果的にサポートする指導用教材

指導用テープ ① ② ③ 指導用テキスト付き 各C-60・10本 29,000円

指導用CD ① ② ③ 指導用テキスト付き 各12cmCD・10枚 29,000円

ビデオソフト(VHS) ① ② ③ 各巻シナリオ付き／分売各巻 7,000円  
1年・2年各14巻セット 85,000円／3年12巻セット 75,000円

### 英語学習 CD-ROM ① ② ③

(Windows 98 Second Edition / 2000 / Me / XP 対応) 各CD-ROM 3枚組 9,800円  
スクールパック 11本パック 各76,000円・21本パック 各140,000円

ピクチャーカード ① ② ③ ドリルチャート付き 各B3判 39,000円

フラッシュカード ① ② ③ 各学年 18,000円

(表示価格は税別)

# 新しい教科書にぴったり!

新しい  
スタート。  
新しい  
辞書。  
辞書は  
三省堂



楽しく、わかりやすく、  
くわしいオールカラー版  
中学の学習に十分な  
6,400語。新登場!

## 中学 カラークラウン 英和辞典

田島伸悟 監修  
三省堂編修所 編  
B6変型判 672頁  
1,900円

中学英和・和英辞典の  
トップセラー

初級クラウン  
英和辞典  
和英辞典  
英和・和英辞典

**全面改訂版**

日常学習と高校入試に万全。  
【英和】  
13,000語+カラーページ 32頁  
【和英】  
12,000語+カラーページ 16頁。



英和1,600円/英和CD付き1,700円/和英1,600円/合本(英和・和英)CD付き3,000円

(表示価格は税別)

# 三省堂

〒101-8371 東京都千代田区三崎町2-22-14 ☎03 (3230) 9411 (編集室内)・9551 (営業)  
英語教科書編集室 ☎03 (3230) 9422

□大阪支社 〒530-0002 大阪市北区曾根崎新地2-5-3 ☎06 (6341) 2177  
□名古屋支社 〒460-0008 名古屋市中区栄3-25-43 瑞穂ビル4F ☎052 (252) 9211・9212  
□九州支社 〒810-0012 福岡市中央区白金1-3-1 ☎092 (531) 1531・1532  
□札幌営業所 〒060-0042 札幌市中央区大通西15-2-1 ノヴァ15ビル2F ☎011 (616) 8722

ホームページURL <http://www.sanseido-publ.co.jp/>